

て行くうちに、彼の美意識の中に、私のやるべきテーマを見いだしたのである。

業平集における美意識との出会いはブルトンとナジャの磁極的出会いそのもののように、私に困惑めいた心地よさを味あわせた。業平集にみたそれは、私個人における貧弱な美的体験の中にも確実に一歩ずつ位置づけられていったのだ。その美意識とは、はずされた場での多くの体験から生じたもつとも人間的感性の出会いである。

一つに概念を否定し破壊する空間的作用で、とまどいの中に、もろく美しく輝く生命をもつものである——すなわちここでの概念の否定とはデュシヤンのレディメイド的イメージというより世俗を超越したという方に近い。又、破壊とはダダ的イメージではなく、とまどいの中から生じるシャープなものと言うべきだろうか——世俗を超越した美的世界に純粹なものを求めつつ生きて生きようとした業平はすべてを愛にみた。それは永遠なる美的なる存在である。しかも自らの滅びの美学でもある。わずかな生なまにとたくす極限的姿は美しい。滅び行かんとする美を一瞬にとらえ、自ら同化せんとする者にとつての対象は永遠なるものである。その頃の私は、それと同じものを谷崎の「春琴抄」三島の「金閣寺」の中にみた。二つの作品と業平集を比較し結びつけ一人よがりな卒論を書き進めていた折から三島の死が報じられた。三島の思想とは無関係に、すくなくならず動揺していた。それはまさしく金閣寺が炎上し、くずれ落ちたのだ。

過ぎ去りし時をはろけく思うなり業平集をくくりにし日々

## △芭蕉の俳論▽

——不易流行について——

第三回卒業 柳井 民子

卒論を書いてから、早くも二年が経ようとしている。提出間際のせっぱつまった苦しみを忘れかけ、あの当時のあがきにも似た状態が懐しく思いだされる昨今である。

私は、卒論に芭蕉を選んだ。理由は、生涯を旅に過ごすといった常人では真似の出来ない芭蕉の存在が、日本文学史の中で最も自分から遠い存在に思われたからである。私にとって芭蕉は、モノクロームの世界であり、色彩の感じられる世界ではなかった。もし、ここで芭蕉との、つながりをもたなかったらおそらく一生読まないで終ってしまうかもしれないと思った。私にとって最も遠い存在を最も近い存在にしたい、こんな気持を契機に題目を「芭蕉の俳論——不易流行について——」と決め、準備にとりかかった。まず最初に、芭蕉研究のベースとして、小宮豊隆の『芭蕉の研究』を読むように、このことで読み始めたが、著者の芭蕉に対するのめり込むような傾倒ぶりと、著者の人格を彷彿と感じさせる文章に圧倒されて、読み終えた後、強度の虚脱感を味わった。しかし論文の提出日も決められているので、いつまでもその中に浸っているわけにはいかない。そこで何をもちて芭蕉とかわりあおうかと考えたが結局、上記の題目に決めた。不易流行とは、芭蕉俳諧の根本理念であり、これを理解することなしに芭蕉芸術の本質に迫ることは出来ないと思えたからである。芭蕉は、古人の求めたところのものゝを不易と名づ

け、それを求めて、日々新たにしていって、日々新たな世界を創造しつつ生活することを流行と名づけた。つまり時代の移り変わりに影響されず、安定した恒常性が不易であり、その時その時における新しみを創造してゆくことが流行である。瞬間瞬間の新しきは、即消えてゆくもので永遠性をもたない。永遠性を含む不易であって、永遠性に連なる流行でなくてはならない。不易と流行は、一見矛盾しているようにみえるが、俳諧文芸の本質を静と動の異なった視点から見ていることに他ならない。

しかし「芭蕉の俳論」と銘うったものの芭蕉は、一冊の俳論書も書き残してはいない。句作者の心構えとか、句をつくる際の精神構造なるものを解説していったら俳諧の生命である新しみが得られなくなってしまうことは、芭蕉自身が一番よく知っていたはずである。

それでも折にふれ不易流行とは、いかなるものかを説いた。土芳や去来の俳論書を見ることによって、又芭蕉自身の書いたものの中から、書簡の中から、さらに彼の作風の変遷、つまり芸境の変遷をみるにより推察出来る。貞門から談林へ、さらに蕉風へ、又その中でも『冬の日』の風狂の世界から「猿蓑」の、わび・さび・しをりの世界へと展開していった。そして最後に『炭俵』において、かみみの境地を説くに至る。芭蕉にとつて俳諧とは、おかしみの表現ではなくて自らの魂の感動の表現であった。芭蕉は、自然を人間と対立するものとしてではなく、人間と調和するものとしてとらえた。そして自然と融合することにより、具体的には旅を続けることによって自己変革を試みた。近世という時代の中で一所不住の生涯をおくった芭蕉は、庶民層の中に真実を窺見し、美をみいだしたのである。

私の中で、涸れたイメージでしかなかった芭蕉像に、どれだけ血をかよわせ得たか。資料を読解することにおいて、何度も消化不良をおこしたりして、その点については心もとないが、卒論を書き終えることによって、又ゼミ旅行をすることによって私のイメージの中でいくらかは、生き生きとした芭蕉像になったような気がする。

四泊五日の予定で伊賀上野をふりだしに、芭蕉記念館で館長さん自らの説明をうけたこと、石山寺の近くの宿で、八人で歌仙をまいたこと、みの虫庵での老婆の呪文を唱えるような調子の説明を聞いたこと等は、いまだに忘れられない。幻住庵跡を訪れた時など、蚊が多くて困ったが、石碑に書いてある芭蕉の句を読まなくては、ここを動かない等と先生に言われ、皆が足踏みをしながらどうにか読んだ記憶も懐しい。

ゼミでの出会いに、ことよせて名称を「連衆会」とし、毎年十月十日に会合をもっている。そして、みかん狩りに行ったり、食事をしたりしてお互いの人間としての変遷の過程を確かめあっている。これを書いてる最中に悲しい知らせを受けた。かねて病氣療養中であった、ゼミの仲間の鈴木ふみ子さんの訃報である。謹んで哀悼の意を表したいと思う。

## △王朝の音楽▽

——源氏物語と枕草子をめぐって——

第四回卒業 稲葉 優子

大学から「卒業論文の思い出」を書くよう依頼をうけ、正直いってとても困ってしまいました。この三月に大学を卒業し、四月から